
眞実

南波航助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眞実

【Zコード】

Z2920D

【作者名】

南波航助

【あらすじ】

とある中学校で教師が殺害された。それも首をナイフでひと着きされたという不自然死だった。教師の担任クラス全員は犯人が誰だかを知っていた。誰一人として言うこととはなかつた。事件から十年の月日が経ち、今年の十一月八日に事件は時効を迎えるようとしている。事件発生時新米刑事であった三田春一は、時効間近の事件に興味を抱いた。頭の固い女性刑事浅野美和子と共に、この難事件を解き明かそうとする。果たして事件の真実とは。

嘘を付いてしまった。今までそんなこと、無かつたのに。それも、多くの人間にだ。僕はどうすれば良いんだろう。中学だつてもう行きたくない。ゲームをしている方がよっぽど楽しい。みんなうつとおしく感じる。僕はベッドの上でそんなことを考えていた。小さな部屋。それが僕の居場所。

「浩助、ご飯」

母親のうるさい声がまた聞こえてきた。今呼ばれたように、僕の名前は浩助。川野浩助だ。

「今行くよ」

「早く来なさい」

「分かってるから」

どうして親つてのはここまでしつこいのだろうか。僕の心は熱くなりだちを覚えていた。ああ、どうしても気になってしまふ。あの嘘が。僕は階段を駆け下りた。一段一段が母親に会いたくないと物語つているようだった。

家族四人が食卓に座った。僕の兄が隣で姿勢良くそびえ立つている。天才だからそう思えてしまうのは仕方ない。

「あなた、庄一ね、今度学校のスピーチコンテストに出るんですって」

「ほほう、それは良かったな」

父親はいい加減だ。どうでもいいの一言につきていた。話題になるのはいつも兄ばかり。もうこんな暮らしは嫌だ。死にたいと何度もつたことか。いつもの用にご飯は終わつた。そのまま僕は部屋に戻つた。「勉強しなさいよ」と母親に言われながら。

「はあ」

僕は大きくため息をついた。あの嘘、どうよつか。携帯が鳴つた。

「もしもし」

「あ、浩助えちょっと良いか」「良いけど」

親友である畠広だった。僕はどきつとした。

「あの」となんだけど

「うん」

汗が額から流れ落ちた。

「呼ばれたんだろ、学校に」

「ああ」

「何て言つた?」

「何も知らない、つて」

「親にもか?」

「そうだよ」

「分かつた。お前もその気なんだな」

「・・・・・うん」

「分かつた、じゃあなあ」

「おう・・・・・」

電話が切れた。胸が痛い。この感覚は何だ。僕は学級長だ。今日の学校でのこと、常識では考えられないようなことが起きたんだ。僕は頭を齧った。咄嗟にテレビを付けた。予想通りのニュースが流れている。

「今日未明、石川中学校の教員多田秀男さんが何者かによつて殺害されました。警察では現在も捜査を進めている模様です。中学生からは何も知らないとの声が多く出されており、犯人は今だ不明です。殺害状況は大変複雑であり捜査は難航しております。多田さんはもともと理科の教師をしていて・・・・・」
テレビを切つた。かみかみのアナウンサーだ。やつぱりな。死んだんだ、多田先生。明日の学校はこれでぢゃらだりつ。
「浩助、明日の学校は休みだつて」
母親がまた叫んできた。

「ああ」

「やつぱりあのことが原因のよつよ

「そうだろうね」

予想は的中した。先生が一人死んだんだ、当然だろう。本当にあいつがやつたのか・・・・。警察を巻くほどの事件。犯人を僕は知っていた。同じ組の男子、如月裕也だ。彼は一言で天才と言える様な男だ。クラスのボス。多田先生には恨みを持つていたらしい。彼が僕に言った言葉。「完全犯罪は可能なんだよ」って。本当にやつちやうなんてな。彼の父親は政治家だし、お金に困ることは無いらしい。クラスのみんなに昨日宣言していた。有言実行かあ。このこと、誰かに言つたら僕も彼に殺されてしまうかもしれない。クラスの誰一人として、このことは言わないだろう。僕は頭を抱え込みながら、そう思つていた。

「こ」の事件、そろそろ時効らしいね

「え、マジッスか」

俺の名前は三田春一。どこにでもいるような刑事だ。十年前起きた教師の不自然死事件が今年の十一月八日に時効になるらしい。今が十月だから・・・・後一ヶ月程度か。この事件の時、俺は新米刑事だった。あの頃は興味が無かつたが、時効になつてしまふとなると少し残念だ。

「で、田辺さん。これって、どんな死に方でしたっけ?」

俺は上司である田辺三郎に聞いてみた。

「えつとねえ・・・・。確かあ、中学の教師がねえ。理科の研究室で、首をナイフでひとつ着きされて倒れてたんだつけなあ。でもねえ、何の証拠も見つからなかつたらしいんだよ」

「へえ、そなんすか」

俺みたいな頭の持ち主では解けそうにない問題だ。

「ホント、分かんないよねえ~」

「はい」

田辺の口癖は語尾を伸ばすことだ。たまに嫌になる。

「何か、気になりますね」

「うんうん」

「俺、調べてみよっかなあ」

気になると行動に移したくなるのが俺の癖だ。

「ここんとこ事件ないし、良いよお」

何ていい加減な上司なんだろうか。まあ嬉しい限りであった。

「じゃ、頑張りたいと思います」

「終わったら仕事やって下さいねえ」

「はい」

俺は元気よく返事をしてしまった。この事件には何がある。今更だけど、刑事の勘つて奴だった。

「ならほら、これ使えるんじゃない？」

「何ですか」

「その時のクラスの名簿だよ」

「おお~」

「十年前だからねえ、個人情報とかうるさくなかったもんだから住所も載つてるよ。まあ多分引っ越してるところが多いと思つけどね」

「借ります」

「いいよお」

俺はパツとファイルを受け取った。三日坊主であることも俺の癖であつたから、田辺も軽い気持ちだったのだろう。

「一人つても寂しいっすねえ」

「そうだねえ。あ、ほらほら。浅野くんも一緒にどうよ?」

それまで隣で書類に手をかけ、話に一切入ってこなかつた女に話しかけた。

「私は結構です。仕事がありますので」

「いいじゃないの、たまにはさあ

「いえ、職務がありますので」

田辺は浅野に嫌われている。浅野というのは浅野美和子という女で、一年前ほど前からここで働いている。仕事女という感じであった。

ルックスは良いのだが、性格がちょっと。

「ほらほら、この事件手伝わないと仕事やらせないよ

「そ、そんなあ」

おかしな話である。

「分かりましたよ、その代わり、給料はしっかりと頂きますよ

「いいよいよ」

いい加減な田辺。

「田辺さん、良いんですか？」

俺は思わず聞いた。

「いいのいいのあ」

「何でです？」

「若い一人は難問を乗り越えてくれよお

意味が分からぬ。

「せや、おー一人とも早く行きなさい。せ、早く」

「ああ」

俺と浅野は押され、無理やり外に出されてしまった。俺はドアの隙間から中を覗いてみた。田辺が携帯ゲームを出していた。笑顔が溢れている。そういうことか、ゲームを職務中にもやるために俺らを・・・・・まあこっちとしてはいい話だ。このままにしておこう。

「さ、浅野。調べるぞー！」

「・・・・・はい」

そんなこんなで俺らはこの難事件を調べることとなつた。

「おー、寝るなよー」

「あ、すいません」

俺は助手席にいた浅野の頭を叩いた。

「次、当時の学級長だった川野浩助の所行くぞ」

「はい」

赤いワゴン車のエンジンをかけた。俺らは十年前の教師変死事件の真相を探るため、調査を続けていたところだつた。

「すいませーん」

浅野がインター ホンを鳴らした。ドアが開き、一人の女性が現れた。

「何ですか？」

「ちょっとお話をしたくて、あの～浩助さんはどちらで～？」

「浩助？ 浩助なら隣町にいますけど・・・どうぞ？」

「申し遅れました。警察の物です」

浅野はサッと警察手帳を見せた。女性の目が変わった。この事件がよほど衝撃的だつたものなのかもしれない。

「何か、やつたんですかあの子」

「いえ、そう言うわけでは～」

俺は汗をかきながら手を振つた。女性から詳しい居場所を教えて貰い、俺らはその場を後にした。再びエンジンの寂れた音を鳴らしながら車を走らせた。

「おいおい、もしかしてここかよ

俺は大層立派なお屋敷を指さした。

「そうですね」

浅野は冷静に言った。インター ホンは無くライオンの顔をしたノックを一回ほど鳴らした。

「どちらさん？」

そつきの女性にそつくりな二十代前半の男が現れた。

「浩助さんですか？」

「そうだけど」

「お話をさせて頂いてもよろしこでしょうか？」

「え、セールス？」

「違います！」

浅野は警察手帳を見せた。

「何の用ですか、刑事さん」

「お邪魔させて頂いても良いですか？」

「あ・・・・・・・はい」

俺らはずうずうしくも中へと足を踏み入れた。

「ハーブティーです」

それはそれは美しい女性が紅茶を入れてくれた。

「家内です」

「そりなんですかあ～お美しい

「いえそんなあ」

女性は顔を赤らめ、キッチンへと戻った。

「寝るな、浅野」

ソファーにもたれかかりまぶたを閉じている浅野を小声でしかつた。

川野は苦笑いをしていた。

「す・・・・・・すいません！」

いきなり大声で浅野は叫んだ。

「馬鹿！」

俺は頭を叩いた。

「大丈夫ですよ」

川野は紅茶を飲みながら言つた。

「ところで川野さん、お仕事は何を？」

「私ですか？いやあ～ちょっとエリ関連の仕事を

「なるほどねえ～」

やつぱり世の中は足より頭なのか、と俺は感じた。

「あの～、刑事さん。話つて何ですかねえ？」

「あ、すこません。お話というのは・・・・十年前の教師変死事件のことについて何ですが。当時あなたはクラスの学級長でしたよね。それでお話をと思いまして。ちょっと気になつてしまるものでえ～」

川野の顔色が変わった。異常なほどにだ。紅茶を降ろし、口を開いた。

「ああ、あの事件は幼い私にとって衝撃的なものでしたよ」「そうだと思います。あのお～もうじつこく聞かれたと思うのですが、何かお心当たりはありますかねえ」

「いえ、特には無いですよ」

「そう何ですか。では、多田先生を恨んでいた生徒などはどうでしたか?」

「はあ・・・・まあ生徒を平氣で殴る先生でしたから、嫌わ
れてはいましたよ」

「ほほう、どんなことで?」

「忘れ物だとか、授業態度とかで」

「中でもどんな人が恨みをもつていましたかねえ」

「いやあ～十年前のことですからあ。ちよつと覚えてないです。す
いません」

川野は少し笑いながら言つた。

「ありがとうございました。失礼します」

「え、もうですか?」

「はい。またお伺いするかもしません」

「また?・・・・いいですよ。ではお氣を付けて」

「ありがとうございました」

俺らは家を後にした。最後まで川野の奥さんはお辞儀をしていた。良くなき人間だと俺は感心していた。となりのこいつに比べると正反対のようだ。

「三田さん、何か今思いましたあ?」

「いや、何も

「こいつ勘が鋭いな、そこだけは感心できる。

「ところで、何でまた来る何て言つたんですか？」

「いやあ～ちょっとね。川野、何か知ってるぞあいつ

「何でですか？」

「あいつ、俺らが刑事だと言つて十年前のこととはなししたら途端に顔色を変えた。異常なぐらいだつただろ」

「そりなんですかあ？私寝てたから全然覚えてないです。ははは」

浅野は何故か笑つている。こいつ、馬鹿か？と俺は思った。

「あいつの話じやあ恨んでいる奴は大勢いるつて言つてたな。生徒全員回るぞ」

「ええ～、本当ですか。嫌だなあ」

「黙れえい」

俺は一気に車のアクセルを踏んだ。

「あ、あそこにいるのつて如月真之介じゃないですか？」

浅野は窓の外を指さした。

「総理大臣の如月かあ？」

「はい」

「ホントだ。演説か何かかなあ」

俺はどうでも良い思いで総理大臣を横切つた。

「そういうえばあ～如月真之介の息子も優秀なんだつてなあ～

「そりなんですか」

「何か、科学者らしいよ

「す”いですね」

どうでもいいような感じに浅野は言つた。

「確かあ～、名前は如月裕也だつたけなあ～」

俺は自分で言つた言葉に衝撃を受けた。

「あれ、如月裕也つて・・・・・おい浅野、ファイルにその名前無かつたか？」

「えつとですね」

浅野はのろのろとページをめくつていいく。

「あ、ありますよ。如月裕也って

「総理大臣の息子、天才科学者・・・・なんかありそうだな。
・・・・おい浅野、聞いてんのか？」

浅野は寝ていた。いびきをかきながらだつた。

「怪しいなあ・・・・まだまだ調べる価値はありそうだ！」

俺はアクセルを強く踏んだ。

3：対面・解明

「刑事さん、そんな昔のこと覚えてるわけ無いでしょ」「う

「そ、そうですかあ？わ、分かりました」

俺と浅野は如月裕也に聞き込みをしていた。

さすがに天才だけはある。言葉一つ一つに説得力があるのだ。

「あの～、川野さんの話では多田先生を恨んでいたとか？」

「あ～、でも刑事さん。そんなんで人一人殺せますか？第一子供が教師の首をナイフでなんてばからしい。ハハハッ！」

確かにそうである。子供が大人を刺し殺すなんて、ありえないかもしない。

「そうですかあ。分かりました、調べ直しますね」

「もしかして、僕が犯人だとか？ハハハハハツ」

「あ、ハガ二個増えた」

浅野がぼそつと言った。

「馬鹿やろう！」

どうでもいいところで食いつくところがこいつの悪いところだ。

「如月さん、あの～あなたはどう思いますかね？」

「この事件ですか？」

「はい」

「まあ、殺人ですよね。犯人の痕跡がないなら、仕組まれた犯罪じゃないですか？」

「ほほう、ありがと～ございました」

俺らは科学の臭いが漂う部屋を後にした。

仕組まれた犯罪？だとしたらどんな方法があるのか。俺はふと事件の様子を考えた。被害者の多田は喉を仰向けの状態で刺された。普通、そんな刺され方するだろうか・・・・・・。

「おい浅野、部屋の写真を見せてくれ

「え、私ですか？」

「違う！職員室のだ！」

「は、はい」

どこまであほなんだか。

「これです」

「ん～異常なところは・・・・・・あつた！」

俺は写真の床と天井を指さした。黒っぽくなっている。しめつてい
るようだ。あせつて記録を確かめてみる。

「天井と床に水の後・・・・これは、どういうことだ。ろくに
調べもしないで・・・・これは殺人と関係があるかもしれんぞ
！」

「へえ～で？」

「だから・・・・・・分かつたぞ！」

「え、嘘だ～」

全く信じない浅田を放つておきながら俺は話し始めた。

「首を刺されたんじゃない、首に、ナイフが落ちてきたんだ。多田
は当時睡眠状態だったんだろう。つまり、仰向けになつていて
るに天井からナイフがストーンつて！」

「あのしみは？」

「水・・・・・氷だ！氷でナイフを固定したんだよ、やがて氷が
溶け・・・・・首に落ちた」

「そそ、それだあ！春一さん、それですよ、犯人はその手を使つた
んですよ」

俺は確信した。この事件の真実が分かつってきたのだ。これは、仕組
まれた殺人だ。後は情報を集め、犯人を突き止めるだけだ！

俺と浅野は、殺人方法を偶然にも解き明かしてしまった。たぶん、この考へで良いのだろう。残すは、犯人を捕まえるだけだ。時効日は十一月八日。今日は十一月二十八日。まだ日にちはある。

「おい、浅野！お前は誰だと思う？」

「私ですか？えっと、んつと・・・・川野さん？なんか、怪しいです。恨んでいる人がたくさんいた、なんて言いませんよ普通」「なるほどなあ」

「で、春一さんはどうなんですか？」

「俺かあ？俺はなあ、あのクラスメイト全員だと思ひぜ」「はあ？どういうことですかあ？」

「今まで、いろんなどこに聞き込みしたけど。みんなおどおどしてた。そして挙げ句の果てには恨んでいた人はたくさんいた、で店じまいだ」

俺は誇らしげに言つた。

「と、言つことはあ？」

浅野は顔をひつくるめて覗き込んできた。運転に集中できない。今向かっている所は浅野に内緒にしている。

「犯人を全員が知つてゐるつてことさあ、隠し通してゐる。つまりだ！」

いきなり俺が叫んだのを聞き、浅野はびっくりした。

「犯人は、大物つてことさ。言つたら殺される。そういう思いを持たせてるんだよ」

「なるほど・・・・つてことは、副学級長の田中さんかあ！」

浅野は自分の手を叩き、納得したかのように頷いた。

「なんでだよ？」

「だって、彼女、すつごい美人だったから。逆らえないんじゃないですかあ？」

「違つよ、第一俺はその田中とかこう名前自体忘れてたよ

俺はことじごとく突っ込んだ。

「犯人はなあ、如月だ。如月裕也だ！」

「へえ～」

やけに無関心だった。

「何だ、その態度はあ？」

「だつて、そんな証拠が無いじゃないですか」

「ん～、確かに・・・・相手は政治家に科学者。こんな推理だけじゃあなあ」

俺は頭を囁つた。

「決定的な証拠ですか？なら、川野さんに言つて貰つたのはどうです？」

「川野に？十年間も黙つてたのに、そんなこというかよ！」

俺は完全否定した。

「私に良い考えがありますよ、彼を騙すんです。如月が逮捕されたから、あなたが知つていたといふことも分かりました。だからその時の話を聞かせて下さいって」

「卑怯だなあ・・・・」

「黙つてる方が悪いんですよ」

「う～ん

俺はためらつた。

「きっと、川野が言えれば、他の人たちだつて言いますよ」

今日の浅野はやけに積極的だ。何かあつたのだろうか。

「でもなあ～。騙すつてのもなあ～」

「隠してるのはあつちですよ～」

「隠してるかどうかも明確じゃないんだぞ」

「分かりましたよ、じゃあ春一さんは別のことを調べて下さい。私は、この件に関して・・・・自力で調べますんで～」

浅野は車から出て行つてしまつた。

「ちょっと待てって！」

呼び止めてもこっちを振り向かず、走ってどこかへ言ってしまった。
焦つて電話をかけても出てはくれなかつた。

「何であいつ、あんなに積極的なんだ・・・・・あ！」

俺は思い当たる節があつた。彼女の弟のことだ。彼女の弟は嘘つき
だつた友人に金をだまし取られ、借金に追われる貧しい生活をして
いるのだ。嘘が、嫌いなのだろう。しかし、その嘘をばらすために
嘘を使うのもどうか・・・・・。まあ後のことば彼女に任せよう。

俺は他に何か情報が無いか、調べることにした。

俺は、浅野と別々に調べることにした。

「どうしつかなか……」

犯人は如月裕也。そう俺は考えていた。証拠が無い。どうするべきか。

俺は赤いワゴン車の中を考え込んでいた。

「こういうときは、田辺さんに聞いてみるか？」

俺は電話を手にした。

「もしもし、田辺さん。ちょっと相談があつて

「え、僕に？ ちょっと待つてね。今・・・・・よし、サードステ

ージクリアだ！」

どうやらゲームに熱中しているようだ。

「で、何？」

「あの～、大体の犯人の目星はつきました。殺し方も、一応分かりました」

「すごいじゃん！」

田辺は驚いているようだった。本当にここまで調べるとほんとに思えていなかつたのだろう。

「それで、証拠が無くてですね。何か、良い方法ありませんかねえ？」

「そうだなあ～・・・・・僕が昔調べた事件じゃあ、複雑な仕組みの殺し方なら、その道具の出所を調べてみたら意外と犯人が分かつたよ」

「ああ～・・・・・なるほど。氷の出所かあ」

「氷？ 何それ？」

「良いんで良いんです。ありがとうございました」

俺は電話を切った。

たまには良いことも言つものだ。ありがたい。

「氷の出所を調べてみるかあ」

俺は早速当時の生徒、特に如月裕也の周りのことを調べた。すると、偶然にも一つの情報を見つけることが出来た。如月裕也の父、如月真之介は氷製造会社と政治がらみで手を組んでいたらしい。もしかすると、氷の型を作らせたのかもしれない。

俺はその氷会社、「アイスマン」の社長に会いに行くことにした。

「十年前のことなんですがあ

」「はい、何でしじう

刑事だと自分が伝えると、アイスマンの社長は快く話を聞いてくれた。

「如月真之介さんはご存じですよね

「もちろんですよ。今じゃ総理大臣ですからね」

「特注の氷を作つて欲しいなんて、言わせませんでした」

「ああ～、言われました言わされました。よく知つてますね

予想的中だ。その形さえ分かれば俺の推理が証明されるかもしれない。

「型とか、ありますかね？」

「探せば多分あると思いますよ

「見させて下さい」

「良いですよ」

社長は三十分ほど調べてくると言い、この場をあとにした。自分が

なにかをやつてしまつたのではないかと、おそれいるようだ。

俺はその間、本を読んでいた。「密室、旅館殺人ミステリー」こう

いうものが、大好きだ。

「これでこれで」

社長が戻つてくると、大きな型を持つてきてくれた。予想以上に大きい。

「あの、これ作つて貰えますか？」

「ああ～明日になつちゃうかもしないんですけど・・・・・・」

「良いですよ」

俺は笑顔を浮かべ、明日を待つことにした。

電話番号を伝え、アイスマンを後にした。携帯を開いても、浅野からの連絡はなかつた。

勝手な行動をして、本当に大丈夫だらうか。心配にもなつたが、自分にはやることがある。

そして、彼女にもやることがある。

明日が正念場だ。浅野からの連絡も、明日には来るだらう。

6・真相

「う…………」

俺は赤いワゴン車の中で目を覚ました。
どうやら寝てしまったのだ。

「やばつ、朝になつちました」

今頃後悔してもつ遲かった。昨日お願いした氷をもらいに行かな
ければ。

と思ったとき、携帯がなった。

「もしもし」

「三田さんですか」

アイスマンの社長のようだ。

「そうです。あ、氷のことですね」

「そうですね。出来たので、取りに来て頂いてもいいですか

？」

心の中で、喜んでいた。

「はい。あの…………いくらですかね？」

ここが一番気になるところだった。

「良いですよ、良いですよ。刑事さんのお願いですし。これで殺人

事件が解決するのなら

俺は一瞬顔色を変えた。おかしい…………

「ありがとうございます」

平静を装つたが、社長の言葉のおかしな点を見つけてしまった。

「ではお待ちしております」

電話が切れた。

「なるほど、やつぱりな」

俺は、社長の発言のおかしな点を考え込んだ。
アイスマンの社長には、殺人事件のことなど一言も言つていなかつた。

しかし、彼は殺人事件が解決するのなら、と何故か知っていた。
社長も、共犯だ。そう俺は思った。確信ではないが、この可能性に
かけるしかない。

「社長を問いつめてみるか。今日受け取るのは、ただの氷だな・・・
・・・」

俺は社長に何を問いただすか、整理した。

数時間後、社長から受け渡された氷は、予想通り極普通のものだつた。

普通の氷が大きくなつただけのものだつた。

とりあえず礼を言つたが、これから社長を問いただす。

「社長、これ・・・・・・偽物ですよね」

单刀直入に言つた。

「何でですか、刑事さん」

「あなたはさつきの電話で、殺人事件が解決するならと言つた。私
はね、殺人事件のことなど何も言つていないんですよ。どうしてで
す?」

「そ、それは・・・・・・」

社長は困り果てた様子だった。

「それは、ただ、警察が調べてるなら、殺人事件かと思いまして」「本當ですか？」

— 本当ですか？

汗を流し始めた。

「本当に」とを言わなきゃ、あなたも共犯ですか？」

—そ・・・・・・・・そんなん

如月真之介にナシ

やないのか!!!!」

俺は強気に叫んだ。

ええ・・・・・ああ」

〔ルビテキスト〕

つきました

とうとう社長は白状した。

ことの真相を
福島が口説いて貰った

「こういう」とたつた。如月真之介が話を持ちかけてきたのだという天井にセットでき、ナイフが挟めるような氷を作つて欲しい。細かい構造まで指示されたといつ。両サイドに細長い棒を立て、水滴が真下ではなくサイド方向に落ちるようにしたというのだ。作つてくれれば今後とも良い付き合いをすると言われたらしい。なんて計画的なのだろうか。後日、本当の氷を渡すと話した。

「やつぱりなあ」

俺は車の中で決定的な証拠を握つたうれしさを表した。

裕長の詠歌と
おもてあれは
如月を遠指する

その時だつた。携帯が鳴つた。この音楽は、浅野だ。

「もしもし、浅野か？」

「そうです」

やつと話すことが出来た。

「どうした？」

「川野の証言を得ました」

「どういうことだ？」

「川野を騙してみたんです。如月は逮捕された、だから小学校のときのことを全部話して欲しいって。そしたらですね」

「うんうん」

「如月裕也は、多田先生が殺される前日。クラス全員にこんなことを言つていたそうです。

完全犯罪は存在する、多田先生を殺す、って」

驚きのことに俺は仰天した。

「つまり、クラス中に・・・・俺が犯人だつて言つたつてことか？」

「そうです。他の人の話でも、そんなことを言つていたらしいんです」

浅野、でかした！と俺は心の中で思った。

「良くやつた！俺もな、氷のことから如月が犯人だということを突き止めた」

「やつたじやないですか！」

「おう。じゃあ署で待ってる」

「分かりました」

事件は解決したんだ。犯人は如月で、父親も協力していた。
それで終わりだと、俺はそう確信していた。

7：眞実

事件は、幕を下ろした。

「私たちが、やつたんです……」

俺らは、その一言を待っていた。

「話は詳しく署で聞きます」

浅田は誇りしげに言ったのだった。

俺と浅田は如月裕也に話をし、犯行を認めさせたのだ。
天才のにおいをふんふんさせた科学室で、
如月裕也は全てを自供した。
自分が父に頼んだということも、話したのだ。

その際には、総理大臣であつた如月真之介までもが辞任を余儀なくされた。

事件は、解決したのだ。

関係していたクラスメイト全員は、それなりの処置を受けた。
逮捕という訳では無かつた。

如月裕也の、詳しい犯行動機は分からぬ。

ただ、単純に多田という男を恨んでいたのだろう。

生前、多田はよく研究室で寝ていたらしい。

固定されたイスだったため、寝ている真上に装置を装着したのだろう。

ナイフが挟まれた氷。

実物は、自供させた日、俺が社長から預いた。

それが決定的な証拠となつたのだ。

この事件は、十年の時をえてよくやく幕を下ろしたのだ。

新聞では号外まで出された。

「総理大臣辞任、十年前の教師殺害認める」

このような見出しが、いくつも出されていた。

「まさか、こんな展開になるなんてな」
「はい」

俺と浅野はテレビを見ながらそう言った。

ここは警察署。壁にはいくつかの賞状が飾られている。

事件解決後、警視庁警視総監から頂いたものだ。
日本中の誰もが驚きを隠せなかつた。

俺らは、十年間閉ざされてきた「真実」の扉を大きく開いたのだ。

あつという間だつた。

本当にあつという間だつた。

こんな事件が、十年もの間伏せられてきたなんて・・・・・

真実は必ず表へと出る。

誰もがそう、確信した事件だつた。

三年後・・・・・

俺と浅野はいつも通り仕事をしている。
三年前のことなど、忘れていた。

隣では、新しいゲームを買った男が堂々と遊んでいる。

隣では、くそ真面目に仕事をしている女がいる。

あの日から、俺は度々難事件に手を出すようになった。

今では壁をしつこく賞状が並べられている。

これからも俺は

真実を

見つけ出すだろ？。

7：眞実（後書き）

今まで読んで頂き、ありがとうございます。
もっともっと良い小説を書けるように頑張りたいと思います。
本当に、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920d/>

真実

2010年10月10日14時09分発行